

Title	R. M. リルケ 鎮魂歌(二篇)
Author(s)	田口, 義弘 訳
Citation	ドイツ文学研究 (1986), 31: 96-122
Issue Date	1986-03-20
URL	http://hdl.handle.net/2433/185002
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

鎮魂歌（二篇）

R・M・リルケ
田口義弘訳

ある女友だちのために

ぼくには死者たちがある、そしてぼくはかれらを去りゆかせては

おどろいたものだ、かれらがあんなにも安らいでいて、

あんなにもすみやかに死んでいることになじみ、あんなにもしっくりと、

あんなにも世のうわさと異なって死にうちとけていることに。ただあなたが、

あなただけが帰ってくる。あなたはぼくに触れ あたりをさまよい、

なにかに突きあたっては その物音によって

あなたがそこにいることを知らせようとする。おお ぼくから取り去らないでほしい、

ぼくがゆっくりと学びつつあることを。ぼくは正しいのだ。安らいなく

この事物に郷愁をいだくあなたのほうが間違っている。

ぼくらは事物をたえず変化させているのだ、

事物はたしかにここに存在しているのではなく、認識するやいなや

ぼくらは事物を自分の存在のなかからここに映し出しているのだ。

ぼくはあなたがずっと遠くへ達していると思っていた。それだけにいまぼくは当惑している、

どんな女よりも多くの事物を愛容させた

ほかならぬそのあなたが迷っていて 帰ってくるということに。

あなたの死にぼくらが驚愕した、いや、あなたの

強烈な死がぼくらに暗く中断をもたらし

そのときまでとそれからを引き裂いてしまったこと——

これはぼくらにこそかわりがある。それをただしくとのえるのが

力をつくしてぼくらのなすべき仕事になるだろう。

けれどもあなた自身が驚愕し もはや驚愕の

ふさわしくない今もおお驚愕をいやくということ、

あなたがあなたの永遠性の一部を失って、女友だちよ、

あらゆるものがまだ存在してはいないここに、この場所に

立ち入るとのこと、あなたが茫然としていて、

万有のなかではじめて茫然としていて半端であったため、

無限な自然の出現をかつてここでそれぞれの事物を
とらえたようにはとらえられなかったということ、

すでにあなたがそこに受けいれられたあの循環のうちからあなたを
なにかある不安の無言の重力が

もう数え終えられたこの世の時間に引きおろすということ――

これは、押し入ってくる盗人ぬす人のように、

あまたたびぼくの夜の眠りをやぶる。

ぼくはこうも言えるだろう、あなたはただ思いやりからやってくるのだ、

あなたはもうすっかり安全で、すっかりあなた自身のうちにあつて、

だから寛大とありあまる豊かさからここに来てくれるのだ、と。

あるいはひとりの子供さながら、危険が待ちかまえている場所への

恐れもなしに あちこちを歩きまわるのだ、と――

だが、そうではない。あなたはなにかを求めている。そのことは

ぼくを骨の髄までおびやかす 鋸のこぎりのように責めさいなむ。

もしもあなたが非難しに現われる亡霊であつて、

ぼくが夜おそくぼくの肺のなか 臓腑ぞうぶのなか、

ぼくの心臓の最後の貧しい小室のなかに

引きこもっているとき ぼくにその非難を向けるのだとしても――

その非難はあなたのこの求めのように

苛酷ではないだろう。なにをあなたはぼくに求める？

旅をせよ、とぼくにあなたは言うのか？ どこかにあなたの

置きざりにしたものが苦しんでいて、

それがあなたのところへ行きたがっている、というのか？

ぼくにどこかの地、あなたの感覚の別の半面のようにあなたに親近な

しかしまだあなたの見たことのない国にゆけというのか？

それならばぼくはその国の川また川を船でたどってゆこう。

陸にあがって 古くからのしきたりのことをたずねよう、

戸口にたたずむ女たちと語り、

彼女らが子供たちを呼ぶさまを眺めよう。

その地の人びとが牧場や田畑で

昔ながらの仕事にたずさわっていて

風景を衣服のように身にまとっているさまに注目しよう。

彼らの王の前へと案内を乞い、

そして僧侶たちを賄賂で引きつけ、

もつとも威厳ある神像の前にひとりたたずみ、

彼らは立ち去らせ 神殿の門も閉ざしてもらおう。

しかしこうして多くのことを知ってからは、

単純に動物たちのすがたを見つめることとしよう。

彼らのたたくまいのうちのなにかがぼくの関節のなかへ

すべりこんでくるようにと。ぼくは彼らの眼のなかにしばらくのあいだ

存在してみたい——それらの眼はぼくをたもち

それからゆっくりと放すのだ、安らかに 判断なしに。

ぼくはまた園丁たちに多くの花の名を

教えてもらい、うつくしい名のついた

陶器壺のなかに百花の香りの

名残りをおさめて持ち帰ろう。

そしてぼくはさまざまな果実を買おう、そのなかに

もう一度その国が 天空にいたるまでももっている果実を。

なぜならあなたはこれを、これらの豊かな果実を、理解していたから。

このような果実らを あなたは皿にのせて前におき

そして色彩でその重みをはかった。

またこうして果実を見るように　あなたは女たちを見、
子供たちを見たのだ、内からのうながしによって

その現存在の形へとかりたてられているものとして。

そしてついには自分自身をあなたは一個の果実のように

見なし、着衣のなかから自分を引き出し

鏡の前へと連れてゆき、ただ凝視だけを残して　そのなかへゆだねた。

鏡の前に大きく残った凝視は、これはわたしだ、とは言わず、

これがある、とそう言った。

ついにあなたの凝視はそれほどまで好奇心もなく、

所有もない、真に貧しいものになり、

もはや自分自身を欲求せぬ——聖なるものだった。

あのようなあなたをばくは留めておきたい、

あなたがあなたをあらゆるものから放って　鏡のなか深く置いた

そのようにして。それだのになぜあなたはそれとは異なるものとしてやってくる？

どうしてあなたは自分の存在を取り消してしまう？　どうしてあなたは

ばくに思いこませようとするのか、あそこでもなお

あなたの首飾りの琥珀玉のなかに幾分かの重みがあったのだと？

安らかな形象にみちた彼方には重みはもう

けっしてないはずだのに。どうしてあなたは

あなたのたたずまいのなかに不吉な予感めいたものを見せるのか？

なにがあなたをして自分のからだの輪郭を掌の線のように解釈せよと命じているのか、
そしてぼくには運命を共に見るることなしにその輪郭を見ることがもうできないのか？

この蠟燭の光のなかにきたまえ。ぼくは怖れない、

死者たちを見つめることを。ここへきたときには

死者たちにも ぼくらの視野のなかに

とどまる権利があるのだ、他の事物たちと同様に。

きたまえ ぼくらはしばらく共に静かにしよう。

ぼくの机のうえのこの薔薇を見るがよい。

光は薔薇のまわりでああなたの頭上でとちょうど同じように

臆してはいないか？ 薔薇もここにあってはいけないのかもしれない。

それは、ぼくと入り混ったりはせず、戸外の庭で

とどまっているか去ってゆくべきだったのだろう、――

いまこうしてそれはじつとここにある。この薔薇にとってぼくの意識とはなになのか？

ぼくには今それがわかるのだが、驚いてはいけない、ああ、

ぼくのうちにはある想いがきざしてくる——ぼくはそうするより仕方がない、ぼくにはどうしてもわかってしまうのだ、たとえそのために死のうとも。

あなたがここにすることが わかってしまう。ぼくにはわかるのだ。

ちやうど盲人にあたりの事物のひとつがわかるように、

ぼくはあなたの運命を感じていて、けれどそれにふさわしい名を知らない。

ぼくらは共に嘆こうではないか、あなたがあなたの鏡のなかから

取り出されてしまったことを。あなたはまだ泣くことができようか？

いや できはしない。あなたの涙の力と切迫とを

あなたはすでにあなたの熟した凝視へと変容させ

そしてあなたの内部の体液をすべて

ひとつの強固な現存在のなかへ転置しつつあったのだ、

平衡を保ちつつもやみくもに上昇し循環する存在のなかへと。

そのときしかしひとつの偶然、あなたの最後の偶然が

このうえなく遙かな進歩からあなたを拉して、

体液が欲求する世界へと引きもどしたのだ。

あなたの全体を引きもどしたのではない、最初は一部分だけだった、

けれどそれを核として現実が

日毎に増大して重くなったとき

あなたはそこに自分の全体が必要になり、

あなたのまだ残っているところへとおもむき、あの法則のなかから

苦勞してやっと、打ちくだいて、自分の存在を取り出した――

あなたにはあなたが必要だったから。さてあなたはあなたはあなたを突きくずし

あなたの心の幽暗で暖かい土壌から まだ青い種子たちを

掘り出したのだ。その種子からはあなたの死が芽ばえるべくしてあった、

あなたの固有な生に似つかわしい、あなたのものである、あなたの固有な死が。

そしてそれらをあなたは食べた、あなたの死の穀粒を――

他のすべての人たちがするように、死の穀粒を。

そしてあなたのうちには甘い後味が残った、

思いがけぬ甘み、あなたは甘い唇をもつ人になっていた、

すでに内なる感覚においても甘くなった人、あなたは。

おお 共に嘆こう。あなたにはわかっているのか、いかにあなたの血が、

それをあなたの呼びもどしたときに、ひとつの無比の循環のなかから

ためらいながらいやいや帰ってきたかということが？

いかにとまどいながらそれは肉体の小さな循環に

もういちど服し　いかに不信と驚きにみちて胎盤のなかへ入り

そして遥かだった帰路のために

いかに急激に疲れてしまったことか。

あなたはその血をかりたて　前方へ押しすすめ、

炉端へと引きずっていった、まるで

家畜の群れを犠牲にするため引きずってゆくように。

しかもあなたは欲していた、その血がそうされつつも飲ばしげであることを。

そしてついには無理にその血をしたがわせた。それは

飲ばしく流れよってきて意のままになった。

別の尺度になじんでいたあなたには

これはただしばらくのことのようにおもわれた。

しかしそのときあなたはもう時間のなかにいた、そして時間は長い。

そして時間は過ぎ去り　そして時間は増えてゆき　そして時間は

ある長い病気の再発のようなのだ。

あなたの生涯はいかに短かかったことか、

あなたが坐って　あなたの豊かな未来の豊かな力を、

やどったばかりの胎児に無言で

傾注していた時間にひきかえて。

その胎児はふたたび運命だった。おお いたましい仕事よ。

おお あらゆる力をこえた仕事よ。あなたは

日毎にそれを進めた、あなたは自分をその仕事へと引きずってゆき、

そして美しい緯糸いとをあゝの織機から引き出し、

そしてあなたのあらゆる糸をそれまでと違つた仕方を用いてしまった。

そして最後にもまだ祝い事をなす気があなたにはあつた。

なぜなら、それがなしとげられたとき あなたはその報いを欲していたからだ、

回癒をもたらずだろう甘苦い茶を

飲んだときの子供のように。

さてあなたはみずから自分の労に報いた、なぜならこのときでさえ

あなたはほかのすべての人からあまりにも遠いところにあつたから。

だれも考えだすことができなかったことだろう、どんな報いがあなたの喜びになるかを。

それを知っていたのはあなた自身だ。あなたは産褥の床に坐っていた、

そしてあなたの前にある鏡はすべてをまたすつかり

あなたに向かつて映し返した。そのときすべてはあなたであり、

しかしそれはすっかり、こち、ら側にあつて、鏡のなかには虚像しかなかつた——
飾りをつけたり、髪をくしけずつたり、その型を変えるのが好きな、
あらゆる女性ひとしなみの美しい虚像だけしか。

あなたは死んでいった、以前に女たちがそうして死んでいったように、
あなたは暖かい家のなかで古風に、いかにも産婦のものらしい

死を死んだのだ、赤児とともに産み出した闇がもういちどもどつてきて
無理にからだのなかへ押しいつてくるために、

ふたたび身を閉ざそうとしても

もうそうすることのできぬあの産婦たちの死を。

だが、ぼくらはやはり泣き女たちをやとい集めるべきではなかつたか？

金のために泣き叫ぶ女たち、

そしてそれだけの金を払ってもらえるのなら

あたりが静まりかえっているなかで、夜どおし泣きわめく女たちを。

慣習を取りもどすのだ！ ぼくらには慣習が

足りない。すべては去つてゆき、しかも誤り伝えられている。

だからあなたは、死者でありながら、やつてきて、ここでぼくと共に嘆きを

取りもどさねばならない。聞こえるだろうか、ぼくの嘆いているのが？
ぼくはぼくの声を一枚の布のように

あなたの死の破片が散乱するうえに投げかけ、

そしてそれをずたずたに引きちぎってしまいたい。

そしてぼくの口にすることはすべて、もしもそれが嘆きのままであったなら、

この声の襤褸切れをまよってさまよい　そして

凍ってしまうだろう。だが　いまぼくは非難する、

あなたをあなたのうちから引きもどしたひとりの男を非難するのではなく、

（彼は見分けがつかない。彼は他のすべての男たちと同様だから）

彼のうちにすべての男を、つまり男というものを！

どこかぼくの内深くに　ぼくの幼時にひそんでいた

なにかが立ち現われてきて　それがぼくのまだ知らぬもの、

そしてぼくの幼時のもっとも純粹な幼さであるかもしれぬとき、

ぼくはそれを知ろうとは欲しない。それに目を向けることなく

ぼくはそれからひとりの天使を作り出し、

神を想起させようとして叫んでいる天使たちの

第一列にその天使を投げ入れたい。

なぜならこのような苦しみはもうあまりにも長く続いていて、

だれにも堪えないからだ——それはほくらには重すぎる、

いつわりの愛から生ずるこの乱れた苦しみは。

それは時効と習慣のうえにきずかれ、

みずからを正当な権利と称しつつ不当のうちからはびこる愛の産物なのだ。

所有の権利を有する男がどこにいる？

だれに所有できよう、みずからもそれ自身を引きとめようとしなぬものを、

そしてボールで遊ぶ子供にも似て 折にふれみずからを

ただ浄福に受けとめては また投げあげるだけのものを？

軍船の司令さえ、舳へそに立つ

ニーケをそこに留めておくことはできない、

神秘的な軽やかさによって彼女が

ふいに明るい海風のなかへ浮揚するときは。

同様にほくらのうちのどの男も呼びかけてはならない、

ほくらのすがたがもう眼に映っていない女、

その現存在のせまい小径を奇蹟によるかのように

無傷で立ち去ってゆく女には——

呼びかけるならあえてみずから罪をおかすことになるだろう。

なぜなら もしなにかが罪であるならば、これこそが罪なのだ、

愛する相手の自由をいや増さぬこと、

自己が内部にはぐくんでいるあらゆる自由をも賭けてそうせぬことが、

愛するときほくらのなすべきことはただこれだけ、

たがいに相手を自由に存在させるということだけ。引きとめあうことならば

たやすく またいまさら学ぶべきわざではない。

あなたはまだここにいるのか？ この部屋のどの隅にあなたはいる？——

あなたにはこのようなことがみなよくわかっていたし

多くのことを果たす力があつた、なぜならあなたは 明けてゆく一日のように

すべてにたいして開かれつつ歩を進めていったのだから。

女たちは苦しみをになう。愛するとはただひとりであることだ——

そして芸術家たちはその仕事のなかで折にふれ感知する、

愛するときには変容が必要だということを。

この両方をあなたは始めた。しかしこれらが共にそのなかにあるものは

いまや名声によって歪められ うばい去られてゆく。

ああ あなたはあらゆる名声から遠くあつた。あなたは

つつましかつた。あなたはあなたの美しさを

静かに内にしまいこんでいた、ちょうどひとが旗を

週日の曇った朝に取りこむように。

そしてあなたはひとつの長い仕事のほかなにも願わなかつた——

それは果されなかつた、あなたの願いにもかかわらず果たされなかつた。

あなたがまだここにいるのなら、この暗闇のうちにまだ

あなたの霊がゆるやかな音波にのつて

敏感に共鳴するひとつの場所があり、

ひとつの孤独な声が夜なかに、天井の高い

この部屋の空気の流れのなかでその音波をひき起こしているのであれば——

聞いてほしい、ぼくに助力してくれたまえ。

見よ ぼくらはこうして滑りこんでしまうのだ、いつのまにか

ぼくらの進歩から脱落して思いもかけぬなにかあるもののかへ。

そこでぼくらは夢のなかでのように呪縛され、

そしてもう目覚めることもなく死んでゆく。

その先にはだれもいはいはしない。自分の血を長い時間のかかる

ひとつの仕事のなかへ汲みあげたどの人間にも

これは起こりうることだ、もはや高く支えてはいられなくなった血が

その重みのなせるまま、むなしく流れ出てしまうということは。

なぜなら、どこかあるところに古くからの敵対関係が存在しているからだ

生活と大きな仕事のあいだには。

ぼくはだからその敵対関係を見ぬいてそれを言わずにはいられない、助力してくれたまえ。

帰ってきてはいけない。もし堪えられるなら

死者たちのもとで死んでいるがいい。死者たちは忙しい。

けれども、それがあなたの気を散らさぬようにして、助力してはくれたまえ、

もっとも遥かなものが時おりぼくに助力してくれるように、ぼくの内部で。

ヴォルフ・フォン・カルクロイト伯爵のために

ぼくはあなたをほんとうに見たことがないのか？ ぼくの心は

あなたのためにこんなにも重い、まるでつい引きのぼされている

あまりにも重い開始によってのように。どうかしてあなたのことを

語りはじめたいのに、死者である人よ、　みずから激しい死を選んだ人よ。その死は

あなたが思っていたように安らぎをもたらすものだったのか、それとも

もはや生きていないということは死んでいる、ということからやはりまだ遠かったのか？

あなたはあそこではよりよく所有できると思いきんでいた、

あそこではだれも所有に価値をおいたりはしないのに。あなたは考えていた、

あなたはあちらではひとつの風景の内部に安らえるのだと、

ここでは風景があなたの前でいつも絵のように閉されるのとは異なって――

またあそこでは内部から恋人のなかにはいって行って

そしてすべてのもののなかを力強く振動しながら通ってゆけるのだと。

おお　いつまでもそんな虚妄をいだいて

少年じみた錯誤を追いかけぬほうがいい。

いまやあなたは悲哀という流れのなかに溶かされ

引き入れられて　なけば無意識のまま

遠い星々をめぐる運動のなかで、

喜びを見いだすがよい、夢みられていた

死んでいることのなかへとあなたがここから転置した喜びを、

いかに近しくあったことか、親愛なる人よ、ここであなたはその喜びに。いかにそれはここに宿っていたことだろう、あなたの心が向けられていた喜び、あなたが切実に憧憬していたその真面目な喜びは。

幸福であることにも不幸にも幻滅してあなたが、

あなた自身を掘りかえしてそのなかに沈潜し、そしてひとつの洞察と共にしかしそこに見いだした幽暗なものの重みのもとで

くずおれそうになりながら、ようやくまた昇りあがってきたとき、

あなたはそれまであなたが識らなかつたものを、あの喜びを、

いわばあなたの幼い救い主の重みとしての喜びをになんていて、

それをあなたの血のなかを通して向こう岸へ渡したのだ。

どうしてあなたは待たなかつたのか、その重みが

まったく堪えられぬものになるまで？　そうすればその重みは一変するはずなのに、そしてそんなにもそれが重いのは、その重みがまったく真実であるからだのに。

そう、それはもしかしたらあなたが次に迎える瞬間だった、

その瞬間はもうあなたの戸の前で、髪の花輪を

整えていたかもしれぬのに、そのときあなたはその戸を突然しめてしまったのだ。

おお、このような衝撃がなんと宇宙を貫くことだろう、

ある開かれているものがどこかで　けわしく鋭い

焦燥の風によって閉ざされるときには。

だれに請けあえよう、地中の健かな種子にそのとき亀裂が生じないと。

だれがすでに究めていただろう。このような衝撃がその脳髓に

鋭い閃光を走らせるとき、飼いなされた獣たちのうちにも

恐ろしい殺意がうずかぬかどうかを。

だれが知っていよう、ぼくらの行為からひとつの近い

尖端へとすばやく走る影響のことを、そしてだれが

この影響と動きを共にすることができよう、すべてにそれが伝わるころでは？

あなたが破壊してしまったということ、それは

あらゆる時間にわたって語り伝えられずにはすまないだろう。

そしてひとりの英雄が現われて　ぼくらが

事柄の顔だと見なしているところの意味を

仮面のように引きはがし　そして偽装の眼窩のなかから

その眼が久しく無言でぼくらを見つめていた

もろもろの顔を手荒にあばくときにも、

このことはそんな顔なのであって　ついに変わらぬままだろう――

あなたが破壊してしまったということは。あそこには石材が並んでいて
そのまわりの空気にはすでに建設の

律動が押しとどめがたくただよっていた。

そのまわりを歩みながら あなたはそれらのなす秩序が見えていなかった、
ひとつの石材は他の石材をあなたの眼に隠していて

通りすがりにふとあなたの試したところでは、

どれも根が生えているかのようだった、それを持ちあげられるなどと

まともに思いこむすべもなく。そして絶望のなかであなたはそれらをすべて

持ちあげたが しかしただそれらをもとの石切場の空洞に投げ返すためだった、

いや それらはあなたの心情によってふくらんでいて

もうそこに収まりはしなかった。もしもひとりの女性が

軽やかな手をあなたのそんな怒りのまだかすかな

発端に置いたのであったなら、もしもだれかある人、

深い内部での仕事に忙しかかわっているある人が、

あの行為を果たすべく無言で出ていったあなたに

静かに出会ったのであったなら——そう、もしもあなたの道が

男たちが槌をふるい 一日がそこで単純に実現される

目覚めた仕事場のそばを通ったのであつたら、
もしもあなたの見ひらかれた視圏のなかに

一匹の労苦する甲虫の像が

入ってゆくだけの余地があつたなら、

あなたはとっさの明るい洞察のもとで

あの言葉を読んだことだろう、その符号をあなたが、

そうすればひとつの文章ができあがりはしないかと 幼時から

折にふれて試しつつ ゆっくりと内部に刻みつけてきた言葉を。

ああ そうしてできる文章はあなたには意味をなさぬものと思われた。

ぼくは知っている、ぼくは知っている、あなたはその前に横たわり

その線条を手さぐりしてはいた、ちょうど墓石の銘にでも触れるようにして。

明るく燃えているように見えるものがありさえすれば

あなたは燈火のようにそれを、その符号が並んでいる前へかざした。

けれどそんな炎はその意味がわからぬうちに

消えてしまったのだ、おそらくはあなたの呼吸のために、

おそらくは手の震えのために、おそらくはまた

炎がときどきそうして消えるように まったくひとりで。

あなたはそれをついに読まないでしまった。ぼくらもしかし苦痛をおして、
また遠くからあえて それを読み取ろうとはしない。

ぼくらはたださまざまな詩を見つめるだけだ、それらは

あなたの選んだ言葉を あなたの感情の傾斜の下方へと

いまもなおになっている。いや あなたは

すべてを選んだわけではない。しばしばあなたにはひとつの発端が

全体であるものとして課せられ それらをあなたはなにかの負託のように

復誦した。そしてそれはあなたに悲しく思われた。

ああ あなたは自分がそれを語るのを聞かなければよかったものを。

あなたの天使はいまもなお声を高くあげ そして同じ言葉を

異なった仕方で強調している、そしてその調べを聞くと

ぼくからは歓呼の声があがる、

あなたへの歓呼の声が。なぜなら これがあなたの真実だったから――

すべてのいとしいものがふたたびあなたから離れ落ちていったこと、

しかし真に見るものとなってあなたが諦念を知り、

死のなかであなたの進歩を知ったということは。

これはあなたのものだったのだ、芸術家である人よ、この三つの開かれた鑄型は。見よ　ここには第一の鑄型から

生み出されたものがある、あなたの感情のまわりの空間が。そしてあそこにある

第二の鑄型からはあなたの凝視をほくは作り出そう、

偉大な芸術家の　なにものをも欲求しない凝視を。

そして第三の鑄型——それをあなたはみずからの手であまりにも早く

打ちくだいてしまった、あなたの心臓の灼熱のなかから

震えうごく熔銑ゆうせんの最初の流出がまだほとんどそこに収まらぬうちに——

けれどその鑄型のなかにはひとつの死が入念に

彫り深められていたのだ、あの固有な死が。

その死はばくらをこそ必要としている。なぜならばそれはそれを生きており、

そしてばくらはどこにあってもこの地上におけるほど　その死に近しく存在してはいないのだから。

これらすべてはあなたのなじみ深い資産だった、

あなたはそのことをしばしば感じとっていた。やがてしかし

あの三つの鑄型が空洞であることにあなたは驚いた、

あなたはそのなかへ手を伸ばし　空虚をつかみ出し

そして嘆いた。——おお　昔ながらに詩人の負う呪い、

詩人たちは表現すべきところで嘆き、みずからの感情をいつも造型せずに判定してしまう。

彼らはいかかわらず思いこんでいるのだ、

みずからの内部の悲しみをも喜びをも

知っていて それを詩のなかで

哀惜したり賞賛したりできるのだと。彼らは病人のように

悲哀にみちた言語を使って

痛みの生ずる場所のことを書きしるすのだ、

伽藍の石工がみずからを氣むずかしく

石の平静のなかへ転置する そのように

きびしく自己を言葉へと変容させることなく。

そうすることは救いだったのに。おお たった一度、だけでも

あなたは知るべきだったのだろう、運命がいかに詩句に化し

そしてもう引き返してはこないかということ、いかに運命が詩句のなかで

形象に、ただひたすら形象に化し、あなたが時おり見あげると

額縁のなかで あなたに似ていたり また似ていなかったり思われる

祖先の肖像のようではかなくなってしまうということ——。

あなたは堪えぬべきだったのだ。

けれど　そうはならなかったことを

考えてもつまらない。しかもこんな比喩にはあなたにとって

不当な非難さえかすかにふくまれている。

出来事そのものはぼくらの臆測を

はるかにこえていて　ぼくらはけっしてそれに追いつくことなく

それが実際にはどのようなようだったかをけっして知りえないのだ。

恥じてはいけない、ほかの死者たちが、

最後まで堪えた死者たちが　あなたに触れるとき。

(最後とはなにを言いあらわすものだろうか?)

死者たちとまなざしを交すがよい、いつもそうするようにおだやかに。

そして恐れないがいい、ぼくらの哀悼が奇妙に重くあなたに

のしかかっている　そのためにあなたの姿が彼らに目立ってしまうということも。

出来事がまだ見えるものだった時代の

偉大な言葉はぼくらにとっては存在しない。

だれが勝利について語るのか？　堪えぬくことがすべてなのだ。

〔後記〕

以上二篇の鎮魂歌の拙訳を私は、新制京都大学が発足したのちこの教養部または文学部で専任の教官としてドイツ語とドイツ文学の授業を担当された諸先生のうち、すでに物故されたかたがたに對する追悼のささやかなしるしとして、ここに発表させていただきます。ちなみにそれらのかたがたのお名前を、京都大学もしくは他のいづれかの大学に専任の教員として在任しておられた時代の最後の職名とともにあげさせていただくならば次の通りである。

- 三浦アンナ教授 (一八九四—一九六七)
- 古松 貞一教授 (一九〇二—一九七八)
- 大山 定一教授 (一九〇四—一九七四)
- 梶野 艮教授 (一九〇七—一九七七)
- 臼井竹次郎教授 (一九〇八—一九八五)
- 谷 友幸教授 (一九一一—一九八一)
- 高安 国世教授 (一九三三—一九八四)
- 本郷義武助教授 (一九三四—一九七四)

私にとってこのうちの六名のかたがたは、学生時代に教室で直接に教えを受けることを許された師でもあったが、これらの師より私はただ多くを受けたばかりである。人の死後なるものについて、私はなにをも知らず、なにを語りうるものでもない。けれど私の記憶のなかに、私の想像力のひとつの領域、ひとつの比喩的な世界のなかに、私の死者は生き続ける。いまこの機会に私は深く心をこめて、これら八名の永眠者のかたがたに思いを向け、甦えつつくるさまざま記憶のなかで、より優しく、より寛大で穏やかな姿としてこれらのかたがたの存在を感得しながら、真面目な哀惜の念をあらためずにはいられない (訳者)。